

19 寝たきりにサヨナラを

大分県N町の介護教室で、任運荘の北崎園長の講演が終わると、老婦人が「一言一句のがさず聞きました」と手を差し出しました。聞くと、ご主人が九十歳、奥さんは八十二歳。北崎の亡き両親とほぼ同じ年齢、返す北崎の手に力がこもり、近く訪問を約束しました。

某日、北崎は所用の途次、訪問。早朝、突然のことだったのに、朝食は見事、果物のほかに五皿も。お世話のよさがうかがえます。まず、奥さんをマッサージ。「私もですか」「ええ、お世話する方がお元気でないと」。

ちゃぶ台には『老い』という本や任運荘の介護手引きが見られ、毎日新聞も

あり、連載の『終わりよければ』が楽しみだとも。自分の健康法を兼ねて動作はてきばき、掃除は欠かさない。家の中は整然とし、老人独特のにおいては全くありません。

しかし、ご主人はベッドを動かうとせず、奥さんも独りでは動かさせません。北崎はまず移動にかかります。「おじいっ（こわい）！」と拒む。どうしてもこの壁を破らねばなりません。

両足をベッドの端に下ろさせ、「さあ、私の首によい方の手を回してつかまえて」「ほら、畳に足がついたでしょう」。久しぶりの畳の感触。不安と感動！「さあ、立ちますよ」「はい、よく出来ました」「今度は、いすに掛けますよ」。ベッドの整理が終わるまで梓をつかまえて立ってもらいます。

次は清拭^{せいしよ}。頭髮も熱いタオルでゴシゴシ。「もっとひどくしてくれ」と注文も。もう、しめたものです。やや過保護気味だったのです。あちこちにかゆみ止めもぬります。陰部はただれかけています。「大事なところ。おしっこがすむたびにお湯でふきます」。「このひと、いつもそこに手を入れる、とても聞

かない。「いいえ、これは男の仕事のようなもの、いつもきれいにしてあげて。」「そんなもんですかね?」。ご主人は照れ笑い。

たらいで足の沐(もく)浴。目を閉じ、「家内が腰を痛めた時、ホームにも病院にも行ったが、家が一番いい、今のままがいい……」。奥さんは「あなた、言いたいことがあるんでしょう。胸のうちを聞いてもらいよ、席をはずすから」と退席。

「こんな不自由な体で口惜しいから、ついに荒い言葉が出る。家内はようしてくる。ありがたいこっちゃ」。夫婦のことは微妙です。

自己流の介護に不安だった奥さんに自信をつけた三時間。「起きとうない」と、押し通してきた夫も、その日から寝たきり生活さようならです。次の訪問で、家庭入浴に成功。それからは毎週訪れる子供たちの手で入浴を楽しむようになります。

北崎が初対面でこうもしつくり飛び込めるのは、それなりのことがあるのです。かつてホームヘルパー、その時の経験を記した文の一節をご覧下さい。

——部屋は春でも底冷えがし、夏はむしぶろのように暑い。週二回の訪問のお世話の主なもののは行水（ぎょうずい）である。狭い庭に、たらいを置き、まず髪を、次に体中を洗わせる。「昔はこれでん髪を結（ゆ）うと、もてた」と。終わって、老人は部屋でうちわを使っている。汗びっしょりの私は、残り湯を捨てるのはもったいないと、軽い気持ちで足を洗った。すると、老人が急に声をあげて泣き出した。その湯で足を洗ったのがシャクにさわたったのか、とあわてて詫（わ）びる。

「そうじゃないよ。わしんような年寄りの汚れ湯で足を洗うてくれた。それがうれしゅうて」と、また泣く。私は思わず「おばあちゃん」と、肩を抱きしめた——。（『続 老人たちと共に』老人生活研究所編）

悲境にあるほど人は人間として遇されたい。北崎は人間性をもって接し、老人また人間性をもってこれに応えた。北崎は、「私を待つ人びとがいる。待たれる幸せを貧しい私の心の糧として、日々仕え、残りの人生を豊かにしたい」と手記を結んでいます。助ける者が助けられ、助けられる者が助けてい

る。人間にだけ存する、ふれあいの深い仕組みです。